

ふるさとで、 学び合い

宮城教育大学の根本アリソン先生は、今年で来日24年目。その長い時間を福島県浜通りで過ごしました。

現在も困難が続くふるさとに、少しでも恩返しをしたいと、

アリソン先生は今、学生たちとともに教育支援活動「梨の花プロジェクト」を展開しています。

梨の花に 感謝の想いを込めて

—アリソン先生はどんな研究をされているんですか？

私の場合は研究というよりも指導ですね。学生たちに小学校の英語授業、幼児教育を専門に指導を行っています。

実は、宮城教育大学に着任してまだ1年目なのです。それまでは福島県浜通りの小学校・中学校で24年にわたって英語を教えていました。その現場経験を認めていただき『特任准教授』という立場でこちらに在籍しています。

—「梨の花プロジェクト」は、福島での現場経験がきっかけですか？

そうですね。私は福島県大熊町の小学校・中学校で13年間英語教育を担当してきました。その内9年間は小学校のみで実践させていただきました。大熊町には大野小学校と熊野小学校の2つがあり、毎年700人の児童と向き合ってきました。また、東日本大震災後の5月からの1年間は、混乱が続く南相馬市で16の小学校の指導を行いました。小学校での指導はちょうど10年になりますね。

大熊町ではさまざまな経験をさせていただきました。今こうして宮城教育大学で仕事をし、学生たちにアドバイスできるのは、大熊町での充実した時間があったからこそ。その感謝の気持ちを込めて『梨の花プロジェクト』を立ち上げました。

—プロジェクト名がとても素敵ですね。どんな由来がありますか？

梨の花は大熊町の町花、特産物も梨です。

震災前の大熊町は5月になると、小さくてかわいらしい白い梨の花が町中に咲き誇っていました。秋になれば、お昼や休み時間に必ず誰かが梨を差し入れてくれて…。そういうふるさとの光景を大切にしたいので『梨の花プロジェクト』に決めました。

この名前、武内敏英教育長も気に入ってくれているんですよ。教育長は私の恩師。大変尊敬しています。私が「こういうことをやって

みたい！」とお話すると、いつも「アリソンの自由にやっていいよ」と、今回のプロジェクトも快諾してくれました。

—大熊町は東日本大震災で甚大な被害を受けました。

はい。大熊町は福島第一原子力発電所の所在地ですから、町のみなさんは避難しています。町の機能も会津若松市に移りました。そこで私



宮城教育大学 根本アリソン 先生

宮城教育大学英語教育講座特任准教授。イギリス出身。1989年(平成元)来日。福島県原町市、小高町(現・南相馬市)教育委員会を経て、1998年(平成10)より大熊町教育委員会で英語指導助手を勤める。その後は「小学校・外国人英語講師」として大熊町立大野小学校、熊野小学校、東日本大震災直後の5月からは1年に渡って南相馬市の16の小学校で指導にあたった。



“学びの先”に必要な“斜めの関係”

—「梨の花プロジェクト」の反応はいかがでしたか？

授業で使用する道具の持ち運びやテストの採点をお手伝いしたり、担任の先生をサポートすることが主な活動内容でしたが、子どもたちとの遊びの時間も大切にしました。

2回目の活動はバレンタインデー前日。子どもたちからチョコレートももらっている男子学生もいましたね。「〇×先生かっこいい〜！」って(笑)。また、ブレイクダンスの上手な学生は高学年の男子に大人気。子どもたちにも学生たちにも笑顔があふれていました。だからお別れの時は本当に切なくて…。子どもたちが「離れたくない！」と泣いていました。

このプロジェクトは、大熊町の先生方、子どもたちの支援はもちろんですが、学生たちにどのような目標を立て、どのようなスキルと努力が必要なのか確かめさせる目的もあります。学生たちは大熊町の子どもたちの姿から、さまざまな刺激を受け、改めて「先生になりたい！」と実感したようです。

—プロジェクトを通して感じたことは？

子どもたちはいつも笑顔で明るく振舞っています。でも、それは本当の姿ではありません。たとえば6年生は「1分スピーチ」でこう話すんです。「6年間ともに過ごしてきた全員と卒業したいなあ」。心の奥底の影を見た気がしますね。

今、福島は人口の動きが激しく固定された人数で授業ができない状況が続いています。4月に25人でスタートしても、翌年の3月も25人でゴールできるのか分からない。学級づくりや生徒一人ひとりの気持ちを把握するといったソフト面に対して、現場の先生方は大変苦労されています。

子どもたちも同じです。学校を離れた子どもは新しい学校に慣れなければならない、残された子どもは寂しい。これまでにない複雑なものが、先生方と子どもたちの“学びの先”にある、そう感じました。



2回目の活動では学生たちが雪かき。

は学生たちと一緒に会津若松へ行き、大野小学校と熊野小学校それぞれの担任の先生や幼稚園の先生方のアシスタントをしています。

これまで2回活動を行ってきましたが、回を重ねるごとに参加メンバーが増えています。1回目は、私の授業を受けている学生17名が参加、2回目は学部の枠を広げて募集したところ24名も集まりました。とてもうれしかったです。

—震災当日は大熊町で生活していたんですか？

ええ。震災時は大熊町の教育委員会に勤めていましたから。私には娘が3人いるんですが、真ん中の娘がちょうどあの日、中学校の卒業式でした。それから南相馬市の自宅を離れ、家族で会津若松市で生活しました。現在は相馬市に住んでいます。私は単身赴任。

—このような状況の中で、ご家族と離れるのは寂しいですね。

いえいえ。主人だけでなく、おじいちゃん・おばあちゃんも一緒に暮らしているし、娘たちもみんな大きいので伸び伸びしています。「ママと離れて寂しい？」って聞くと「いいえ」「本当は寂しいんですけど」「本当に寂しくないよ」「ちょっとくらい寂しいって言ってよ」「でも全然寂しくないから」って(笑)。娘たちは自立心が強いから、私がいなくてちょうどいいのかも(笑)。

家族から離れて仕事することを、家族が一番理解し、喜び、応援してくれます。私自身もこれまで積み重ねた経験を活かせるこの仕事の尊さを実感しました。また、教育現場で長年経験した外国人教員から学べるのは、学生にとっても有意義だと思いますね。

—これからの福島教育現場に何を願いますか？

簡単に言えば、前と同じに戻ってほしい。現在多くの課題が山積み状態ですが、目の前のことだけでなく、理想の教育を追求できる環境になればいい。

理想的な教育とは、みなさんの力を借りながら、特別な教育をすることだと私は考えています。福島には全国からさまざまなボランティアが駆けつけていますが、その中には著名人や一流と言われる方々も多く含まれています。そういった方々との貴重な交流を通して、子どもたちには夢を取り戻してほしいのです。

また、人間関係には“縦・横・斜め”のつながりがあります。たとえば親子は縦、クラスメイトや友達は横、そこに属さない関係が斜め。この“斜めの関係”こそが大事だと、かつて武内教育長から教わりました。上下の関係、楽に付き合える関係、これ以外のグレーエリアの人たちとの交流がたくさんあればあるほど、人間性が豊かになるのだと。

今回のプロジェクトのように、子どもたちにはいろいろな人たちと触れ合っ斜めの関係を築いてほしいと思います。

—一回のプロジェクトの予定は？

夏休み後を予定しています。次は福島から仙台に来てもらいたいですね。仙台は歴史的な建物や美術館・博物館に恵まれていますから、学生たちと子どもたちでグループを作って「街探検はどうか？」と考え中です。たこ焼きを食べたり、たい焼きを食べたりしながら楽しくね(笑)。



「お別れしたくない！」
学生も子どもたちも涙々。